

2014 年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価（以下、自己点検・評価）を実施する制度を構築してきました。また上記の組織以外に幼稚園、千里国際中等部・高等部、大阪インターナショナルスクールも学校評価に加わり、世界市民を育成するという同じ目的を持つ関西学院の共同体として、総合学園としての教育の繋がりを深めつつあります。

2010 年度からは、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教職員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見を伺うことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、初等部校長、中学部長、評価情報分析室室長のご意見を伺って、客観的な評価、指摘をいただきました。教育研究関係者、大学教職員、小学校、中学校といった異なる教育に関わっておられる見識ある方々にいただいた評価や指摘を、今後の高等部教育発展の糧にさせていただきます。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を、学校評価ガイドライン（文部科学省、2010 年 7 月付）で示された学校運営における 12 分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」「教育環境整備」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「人権教育」「国際理解教育」を設定して実施しました。「国際理解教育」は、2014 年度より文部科学省から採択を受けたスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）に関連して新たに付け加えました。2014 年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒 98.2%[912/929（前年度回収率 97.2%）]保護者 60.2%[559/929（前年度回収率 54.4%）]教員 95.5%[42/44（前年度回収率 95.3%）]でした。

今年度は 2015 年度からの男女共学化に向けての準備の最終年にあたり、年度末には初めての男子・女子を対象にした入試を行いました。各方面への広報活動や 4 回の学校説明会・オープンハイスクール等を実施し、志願者は昨年度より大幅に増加しました。これまで培ってきた伝統を大切にしながら、新しい制度・体制を創造し、新しい高等部の時代を切り開いていく所存です。また、SGH 事業も次年度は 2 年目を迎え、今年度の成果と評価を踏まえて、同じくスーパー・グローバル大学（SGU）に採択された関西学院大学との連携をより深めながらこの事業を進めていきます。中学部との教員交換人事も継続し、中高連携の絆をより強く推し進めていきます。2014 年度の学校評価で得られたことを真摯に受け止め、男女共学校としての新しい歩みを全力で取り組んでいく所存です。

関西学院高等部はこれからも自己点検・評価を通じて自らの課題を探り、その課題に誠実に向き合って、改善を目指していきます。それによって質の高い教育を生徒に提供し、またその結果を社会に公表することによって信頼を高め、課題意識を共有していく所存です。

2015 年 3 月 27 日
関西学院高等部
部長 石森圭一

学校評価シート

【キリスト教主義教育の実践】

現状の説明

例年通り、教員・保護者と生徒の間にはやや意識の差がある。

今回、特に注目したいのは、昨年度は一昨年度より、生徒が回答した肯定的な回答の割合が下がった項目が多いのだが、今年度はすべての項目において昨年度よりも上がったということである。生徒質問1「高等部の教育はキリスト教が土台になっている」58.3%（昨年度 57.8%）、生徒質問2「礼拝の時間は大切である」69.4%（昨年度 61.5%）、生徒質問3「聖書の言葉に共感できる」73.0%（昨年度 64.5%）。また昨年度、自由出席である早朝祈祷会（火曜日8:10～）には平均出席が50名程度であったと報告したが、今年度は5月に100名を越え、6月より中礼拝堂に会場を移して行った。

宗教部には15名程度の生徒が所属し活動をしている。また保護者が回答した肯定的な回答の割合が保護者質問1 84.3%（昨年 81.3%）とこれも昨年度を上回った。保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」の出席者数も多くなり、次年度は定員が増えることもあり、会場の変更も考えている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

今回、肯定的な回答の割合が上がったのは、関西学院創立125周年の年であったことが影響しているように思う。レーナ・マリア氏をはじめ著名なスピーカーが来られたこと、また建学の精神を主題にしたメッセージが多かったことなどが考えられる。

改善の具体的方策

この肯定的な回答の割合を更に上げるためには、聖書科教員のみならず、全教員が協力し、取り組んでいく必要があると考える。特に今年度顕著であったのは高等部の主題聖句「畑に宝が隠されている」（マタイによる福音書13章44節）について様々な先生方がメッセージをして下さったことである。教師が意図したことではないが、生徒たちにとっては一貫性を感じたようである。全教員の協力の具体的な方策の一つは「主題聖句」を強く意識しながら取り組むということだろう。また、昨年も記したが、宗教的な働きに特化した生徒の育成に、更に力を入れ、彼らを中心に、輪を広げていくことが、重要であると考えられる。

第三者評価／学校関係者評価

- 自由出席である早朝祈祷会には平均出席が、今年度は5月に100名を越え、6月より中礼拝堂に会場を移して実施されておられることは、本当に素晴らしいと思います。キリスト教教育は関西学院の柱なので、肯定的な回答が上がっていることを、とても嬉しく感じています。生徒たちが純粋な気持ちでキリスト教徒と触れる機会を大切にしておられる印象を受け、ますますその気持ちに添えてあげてほしいと願います。
- 現状の説明で、教員・保護者と生徒の間には、意識の差があることを示されていますが、なぜそのような差が生じているかの分析をされることが求められます。改善の具体的方策で示されたことは、より具体的かつ明確な方策が示されることが望まれます。
- 最も肯定的な回答の割合が低い生徒の回答の中においても、「礼拝の時間の重視」、「聖書の言葉への共感」への肯定的な回答が高いことが評価できます。中学部から継続されているキリスト教主義教育の成果であると思われます。心の育ちには時が必要ですので、今後も初等部・中学部などとの連携を図りながら、同教育の充実をはかることが期待されます。
- 高等部教育の根幹が理解されています。アンケートの肯定的回答は、数字以上の含みを持つものかもしれません。今年度、学院創立125周年で行った高等部事業やプロジェクトが、日常的に「学校外」に広く知られる機会に結びつくことを期待したいものです。

2014年度学校評価

学校評価シート

【教育課程・学習指導】

現状の説明

高等部では院内推薦制度に基づいて、例年9割以上の生徒が関西学院大学へ進学している。よって教育課程における目標は、大学で学ぶ力を保証し、多様な社会の要求に応えうる総合的知識を育成することである。そこで3年間の学びにおいて

1. 基礎学力の充実 2. 深く学ぶ 3. 知の統合 を目指す。

学習指導では1年次には全クラス共通のカリキュラム（数学のみ習熟度別授業を展開）を実施し、将来の選択につながる基礎を固め、2年次には英語の習熟度別授業に加えコース制を導入して学びを深めていく。そして3年次には幅広い選択授業や大学教授陣を加えた高大連携プログラムを行うなど、高度な内容の講義に触れる学びの場を設定している。

また、読書科においては「問う力」を育てるカリキュラムの集大成として、3年時にそれらの成果を卒業論文にまとめ、仕上げている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

今年度も教育課程の説明（進級・卒業・推薦）に関しては、教員（質問10）・保護者（質問2）・生徒（質問5）とも、教職員92.8%、保護者80.5%、生徒85.9%と、80%超が肯定的にとらえている。これは昨年度に比べ、生徒は3.6%向上したのに対し、保護者は0.4%低下している。また「学力・体力の的確な評価」に関する質問（保護者質問3、生徒質問7）も、昨年に引き続き保護者85.3%、生徒71.4%が肯定的に評価している。

保護者質問4の「学力の定着を図っている」の項目で、保護者は前年度57.2%に対し、今年度は70.6%で13.4%上昇している。これは宿題などの分量・頻度が増えている事と比例している。ただ今年度生徒は質問8「学力がついた」の肯定的な評価が65.2%と前年度と比べほぼ横這となった。成果としては、生徒自身が実感するには至っていない。

その他昨年度より保護者・生徒ともに肯定的な評価が向上した項目が多く、たとえば生徒質問9「わかりやすく工夫している授業がある」（今年度74.6% 昨年度69.7%）生徒質問11「選択授業は充実している」（今年度70.7% 昨年度63.2%）生徒質問12「補習などは適切に行われている」（今年度70.2% 昨年度68.2%）などは、いずれも昨年度に比べ上昇した。これは学校側の取り組みが一定以上の評価を得たものと考えられる。

半面生徒質問6「外部テストはその後の学習に役立っている」の項目は、引き続き63.2%の肯定的評価しか得ておらず、課題が解決できていない。

改善の具体的方策

教育課程の説明（保護者質問2）で保護者からの肯定的な評価が下がっているのは、説明会に欠席された方への対応が十分でなかったことが考えられる。2015年度は伝え方に改善を行いたい。

生徒質問8の「授業を通じて学力がついている」の項目が、依然として生徒の肯定的な評価は65.2%である。しかし保護者は昨年度（57.2%）と比べ13.4%向上し70.6%になっている。これは学力向上に向けた宿題等の課題量・質の改善が認識されたと考える。

加えて生徒質問9「わかりやすく工夫している授業がある」では昨年度に比べ4.9%、生徒質問11「選択授業は充実している」では昨年度に比べ7.5%、生徒質問12「補習などは適切に行われている」では昨年度に比べ2%向上している。特に補習は年々回数を増やし・質を高めつつあるので、これを継続して推し進めることを通して、今後「学力がついている」という肯定的な評価につながるものと期待する。

なお、本年度は社会科において全教員による授業見学を行い、各教員がその報告書を提出して、それを基にして年末に教員研修会を開催した。

第三者評価／学校関係者評価

- 大学への推薦制度のある学校として、学習意欲を維持することは大きな課題であると思います。その中で、「わかりやすく工夫している授業がある」「選択授業は充実している」「補習などは適切に行われている」など、生徒の評価がすべて昨年度より向上していることは、特筆すべきだと思います。授業が分かることは、生徒たちにとって学校が好きになる第1条件だと思います。まして高校生なので、社会人になる姿をイメージして、今できる学習に前向きに取り組む姿勢をサポートしてあげてほしいと願います。
- 教育課程の評価分析で、進級・卒業・推薦に関する説明は、他と比べてあまりそう思わない、まったくそう思わない、の生徒と保護者の割合が、それぞれ14.1%、19.5%で他の項目と比較して低いです。しかしながら、外部テストが役に立っているかの質問に対する生徒のネガティブな割合は、36.8%、授業を通じ、学力がついているかの質問に対する生徒のネガティブな割合は、34.8%であり、これらの生徒の評価をより深い分析が望まれます。これらに対する改善の具体的方策が示されているが、より具体的かつ明確な説明が望まれます。
- 院内推薦制度を前提として、基礎学力をもとにした学びの深化、さらに統合された知の獲得を目指し、きめ細やかな教育課程を整備する中で学習指導が展開されていることが大変評価できます。このような中、教員質問14「授業による学力定着」（92.9%）、教員質問16「授業研究・授業改善の工夫」（95.2%）など教員側の努力が、生徒・保護者の実感につながっていない様子が見えかねません。今年度は保護者の肯定的な評価の割合が上昇したとのことですから、今後も家庭との連携を図りながら、生徒の個性・能力に応じた学びを展開することが望まれます。
- 教育課程の目標「大学で学ぶ力の保証」は、大学との連携と大学へのス

ムーズな導入を意味し分かりやすいものです。年次ごとの創意に満ちた工夫は、個の意欲を強く喚起するものでしょう。項目において、生徒、保護者、教員の評価ポイントの差異が見られます。「光」と「陰」を合わせ持つ中での実践を、生徒、保護者に伝え、理解のもとに歩むことが期待されます。

2014 年度学校評価

学校評価シート

【教育環境整備】

現状の説明

教育のハード面については、2010年度より高中部整備充実計画により、男女共学にむけて、校舎の新築、増改築を進めてきた。2013年度には、高等部特別教室棟が完成し、2014年度には、高等部本館の共学化・定員増に対応した改築が終了した。また学院創立125周年記念事業として、高等部新体育館が2014年度末に完成する予定である。またICT環境については、現在のPC教室3室を運用している。今後、定員増への対応、教育全体のICT化の進展への対応など、将来的に更なる整備・充実が求められており、高等部にとっての大きな課題となっている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

まず、学校の施設・設備については、教員（質問20 80.9%・質問21 83.3%・質問22 85.7%）・生徒（質問14 86.0%・質問15 77.8%）・保護者（質問7 94.6%）など、大変肯定的な評価をしている。高等部校舎に隣接して建設された新体育館は、これまでグラウンドを挟んで離れた位置にあった不便さを解消するだけでなく、共学化に対応した施設を備え、新たな高等部教育の現場を支える施設になる。

ただ、ICT環境が十分でないと考えている教員（質問25）が45.3%いること、生徒の答えで、質問14「学習に必要な施設・設備」に比べ、質問15「学習面以外の学校生活に必要な施設・設備」の満足度が若干低いことが見られる。

以上の結果から、概ね、高等部の教育環境への満足度は高いと考えられる。尚、今後の課題は、ICT環境の将来的整備と、生徒の生活環境施設・設備の更なる充実である。

改善の具体的方策

まず、ICT環境の整備については、現状の3教室のPC教室のリプレイスによる充実を継続し、高等部情報メディア教育委員会で検討された、将来のICT環境（タブレット端末・無線LANによる教室）の実現に向けて努力をしていくことが課題である。

生活環境面では、まずクラブの部室の整備を行い、新体育館内に新部室を設け、二つの既存部室棟の再配置を行い、充実を図る。その他、共学化に伴い、更衣室などの生活スペースを充実させる。

第三者評価／学校関係者評価

- 男女共学になることにより、体育館や部室、更衣室、特に手洗いなどの教育施設の充実を図ることは、生徒の学校生活を支える基本となると考えます。ICT環境の整備含め、きちんと準備をされておられるので、新入生たちも、さらに前向きに、落ち着いて学校生活に向かえると思います。
- 教育環境については、生徒の評価は高く、ICT機器についても86.0%が肯定的です。この点は、評価できます。ただし、教員のICT環境に対するネガティブな割合が45.3%であり、なぜ、このような違いが生じているのかの分析が望まれます。
- 共学化・定員増に備えて、施設・設備の拡充など教育環境の整備が順調に進められています。また、「学習に必要な施設・設備の整備」、「ICT機器の設置」でも生徒から高い評価を得ています。一方、「学習面以外の施設・設備の整備」では少し評価が低くなっており、改善の具体的方策にある生活環境面の充実を積極的に進めていくことが期待されます。また、教師と生徒の間でICT教育環境に関する意識の違いがうかがえますので、生徒への啓発活動などが必要かと思われれます。
- 理念に基づいた環境が、人を育てています。校舎の持つ質素で静謐なる雰囲気は心を落ち着かせ、時に人格を祈り守っているかのようです。男女共学化に向けての準備もなされました。さらに、安全な動線と使い手の快適さを日常の中に求めることが望まれます。

2014年度学校評価

学校評価シート(重点的な課題)

【人権教育】

重点的に改善に取り組んだ課題

部落差別解消への取り組みから始まった、我が国の人権教育であるが、情報化やグローバル化の進展に伴い、人権課題は実に多様化・複雑化している。しかしながら、その根幹にあるべき目標はマイノリティが大切にされる社会を作っていくことである。マイノリティの人たちが生きやすい社会は、全ての人にとって生きやすい社会である。常にマジョリティに属すべく気を遣う社会は、生きやすい社会とは言えない。また、誰もが何らかの契機でマイノリティの側に立つ可能性を有している。そのようなことを考え、学ぶことを人権教育の根幹の目標としたい。

具体的な取り組み内容

高等部では、人権教育の柱を構成するものとして、学年礼拝の時間帯(10:20~10:45)に人権講座を実施している。一学期は1年生(テーマ:「身近な人権問題」 ①いじめについて ②ネット社会と人権 ③「男女共生社会」が目指すもの)、二学期は3年生(テーマ:「人権を見る視点 ~『暴力』を中心に~」 ①平和と人権 ②様々な人権問題)、三学期は2年生(テーマ:「力をかけ続けることの必要性 ~数十年の単位で人権問題を考える~」 ①部落差別 ②障がい者差別)と、学期ごとに異なる学年を対象に展開している。1学年7クラスを4クラスと3クラスとに分け、1週間に1回の講座(25分間)となっている。

2007年度より、毎年11月中旬に「いじめ実態調査」を実施していたが、2012年度より、9月に実施するようになった。今年度(2014年度)は3年生学年団からの要請により、3年生のみ、7月に実施した。アンケート後の高等部生活の短さを考慮しての要請であった。

取り組み内容に関しての評価・分析

1回の人権講座が25分。実質的な時間としては、3回で約60分となる。いじめをはじめ、いずれの人権課題も当事者にとっては、「生きるか死ぬか」という重い性質を持っている。内容的にある程度深めるために、一つのテーマで3回の講座を基本とした。「マイノリティゆえに生き辛さを感じている人」に対して想像力を働かせることは、大人にとっても難しいことである。自分のことで精一杯になり、他者への関心が薄れていくのは学業やクラブ活動で多忙な高校生にとっても同じであろう。人権講座が終わる学期末のホームルームで、人権講座の「振り返り」を生徒には記入してもらっている。記名式とはいえ、ほとんどの生徒が真面目に記述をしてくれた点は、評価できるように思う。

促進させる方策、改善に向けた方策

高校生が置かれている多忙な日常を鑑みると、人権意識を高めるためのベースとなるものは、人権講座で提供していくしかないように思われる。内外の講師の協力も得て、人権講座の内容を豊かにしていくこと、教師と生徒という線引きを超えて、「同じ人間として」学び、考える時間として人権講座をより良いものにしていくことが最大の課題である。「振り返り」の活用の仕方や生徒へのフィードバックの仕方において、残念ながら教師の側に温度差がある。この点は、管理職からの呼びかけなど、改善が求められよう。

第三者評価／学校関係者評価

- 「同じ人間として」学び、考える時間としての人権講座の位置づけに、共感を覚えます。高等部は以前からきっちりと人権講座を実施しておられ、その準備にはかなりの時間を割いておられると想像しております。本当に貴重な時間であり、きっと高校生たちには、大切な学びとして浸透しているのではと思います。
- 生徒の人権に関する質問 17、質問 18、質問 19 に対するネガティブな割合が、それぞれ 29.5%、36.2%、34.3%と高いです。それらの分析が望まれます。改善の具体的方策は、上記の分析に基づく、より具体的かつ明確な方策が示されることが求められます。
- キリスト教教育を進める中で、重要な教育課題である「いじめ」への対応も含めた人権教育を体系的に実施していることが大変評価できます。一方、「いじめ防止」、「人権問題への意識向上」に関する評価では、教師と生徒・保護者の間で隔たりが見られます。記名式の人権講座の「振り返り」における内容で人権教育の評価がなされていますが、生徒が社会的望ましさを意識して答えている可能性も考えられますので、無記名式の意識調査などを実施することで生徒の人権意識の実態を把握することが望まれます。
- 「人権講座」。外部講師の積極的活用がみられます。切り口を考え、さまざまな試みが評価できます。さらに、実生活との関連付けが肝要です。人権もいじめ問題同様に、日常の兆しや変化を敏感に察知できるプロ集団が求められています。

2014 年度学校評価

学校評価シート(重点的な課題)

【国際理解教育】

(重点的に改善に取り組んだ課題)

国際的な問題への取組意欲・関心

具体的な取り組み内容

2014年度、文部科学省よりスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の指定を受け、GGP（全生徒対象）、GLP（選抜された生徒）の二層の教育プログラムを実施してきた。

GGPにおいては、グローバルな課題・テーマについて、多くの講演・シンポジウム参加を行い、GLPにおいては、国内、海外へのフィールドワーク、高大連携による特別授業、セミナー、留学生との交流など、数多くの研修行事を企画、実施した。そこでは、グローバルな課題についての生徒による課題研究が中心になる。

取り組み内容に関する評価・分析

国際理解教育のプログラムについて、質問31 85.7% 質問32 88.1% 質問33 90.4%と、80%～90%の教員が、肯定的な評価を行っている。生徒の自己評価においても、全体的には肯定的に捉えているものの、生徒質問20 68.7% 質問21 75.0% 質問22 73.6% で70%前後に止まっており、生徒質問20「国際的な問題や世界の出来事への興味・関心が強くなって」いるか、という質問に31.3%の生徒が否定的な答えをしていることが見られる。また、保護者においても、質問10 73.8% 質問11 71.9% 質問12 65.6%が肯定的な答えをしているものの、質問12 34.4%は否定的な答えをしており、まだ十分ではないと思われる。

促進させる方策、改善に向けた方策

2014年度は、スーパー・グローバル・ハイスクール指定初年度と言うこともあり、高等部の国際理解教育について十分な広報活動が行えていなかった。この点を踏まえて次年度以降、実施されている色々な関連プログラムについて広報を充実させ、保護者にも理解を深めて頂くとともに、特に国際問題への関心の低い生徒の割合を減らせるように、GGPプログラムの充実を図っていく。

第三者評価／学校関係者評価

- 以前からも高等部の国際教育には定評がありましたが、今年度文部科学省よりスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の指定を受けられてから、実施しておられるプログラムの内容の深さには、本当に頭が下がります。特にGLPの生徒たちにとっては、高等部ならではの国際教育が受けられるわけで、とても貴重な体験になっていると確信しています。大変だと思いますが、ぜひ頑張って続けてほしいです。中学生も、興味を持っている生徒は多いと思います。
- 国際理解教育に関する生徒の質問 20、質問 21 に対するネガティブな割合が、それぞれ 31.3%、25.1%と高いです。また、保護者の質問 10、質問 11 に対するネガティブな割合が、それぞれ 26.2%、28.1%と高いです。SGHに採択された高等部としては、それらの面での改善が期待され、そのための、具体的かつ明確な方策が示されることが求められます。
- 高等部が 2014 年度に文部科学省より SGHに採択された兵庫県内 3 校の 1 校となったことは、国際理解教育が順調に展開されてきた結果だと評価できます。このような中、「留学希望や海外渡航の意欲の育成」に関する教師と生徒、特に保護者の肯定的評価の顕著な隔たりを見ることができますので、改善策にある保護者への広報を効果的に行うことが期待されます。なお、他府県の SGH採択校の中には初年度よりそのプログラムに対する外部評価を導入している学校があります。高等部でも早期に導入することが望まれます。
- 国際性の涵養は、関西学院が得意とするフィールドです。初等部からの一貫教育の強さが実体験と結びつき、生きて働く力となることでしょう。「スーパー・グローバル・ハイスクール」。継続性のある外からの刺激が、生徒の大きな意識変化につながりそうです。期待を超えた成果があらわれることと思われまます。

2014 年度学校評価

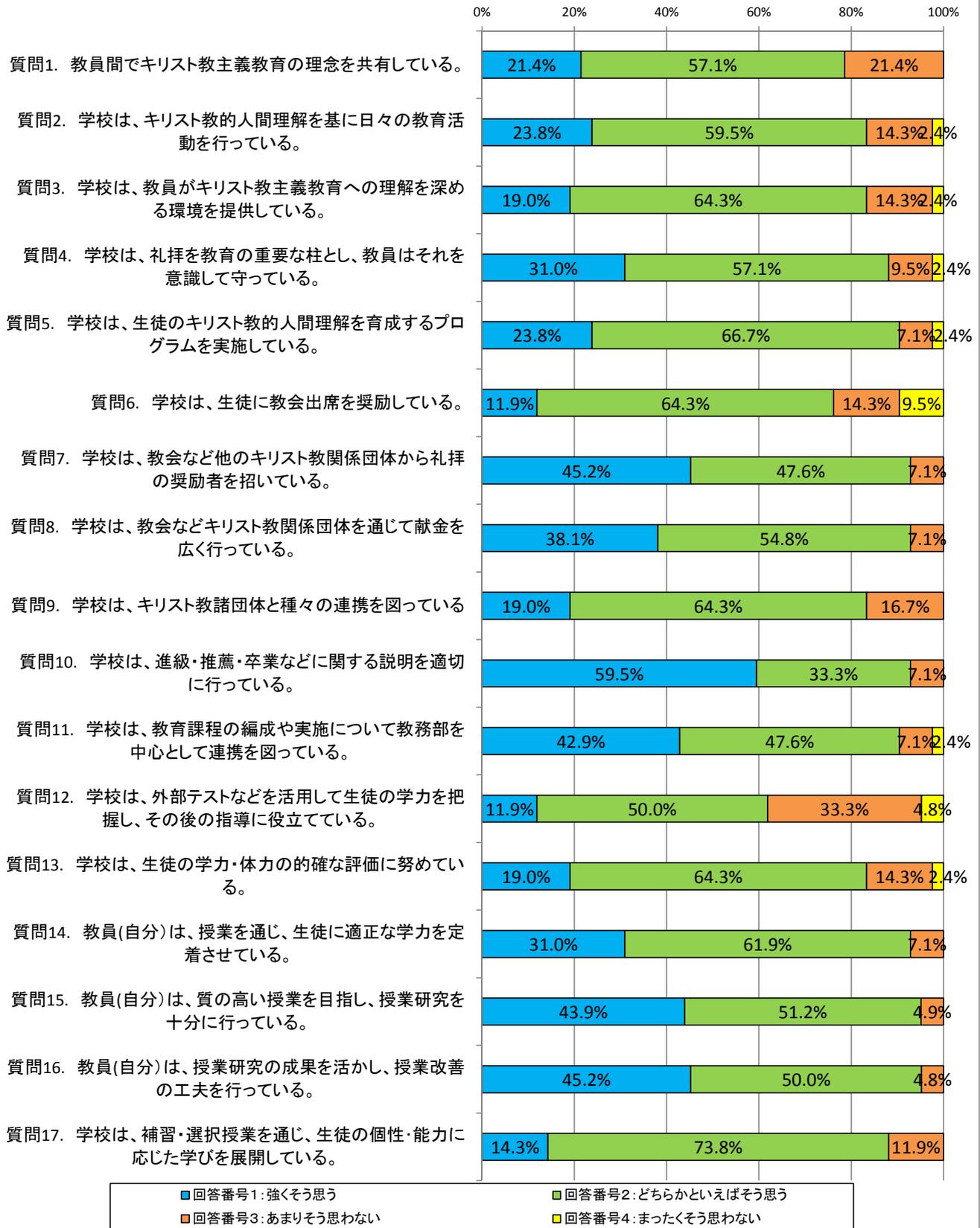
2014年度 学校評価 実施項目一覧（高等部）

大項目	小項目	目標	アンケート			
			教職員用	保護者用	生徒用	
独自項目	キリスト教主義教育の理念の共有	教員間でキリスト教主義教育の理念を共有している。	1. 教員間でキリスト教主義教育の理念を共有している。	1. 学校が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間的成長に寄与している。	1. 高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う。	
		キリスト教主義的人間理解を基に日々の教育活動を行っている。	2. 学校は、キリスト教的人間理解を基に日々の教育活動を行っている。			
		教員がキリスト教主義教育への理解を深める環境にある。	3. 学校は、教員がキリスト教主義教育への理解を深める環境を提供している。			
	キリスト教主義教育の推進	礼拝を学校の重要な柱として守っている。	4. 学校は、礼拝を教育の重要な柱とし、教員はそれを意識して守っている。		2. 学校から進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に受けている。	2. 礼拝の時間は大切だと思う。
		生徒のキリスト教的人間理解を育成するためのプログラムを実施している。	5. 学校は、生徒のキリスト教的人間理解を育成するプログラムを実施している。			3. 聖書の言葉には共感できる部分がある。
		生徒に教会出席を奨励している。	6. 学校は、生徒に教会出席を奨励している。			
	キリスト教関係諸団体との連携	教会など他のキリスト教関係団体から礼拝の奨励者を招いている。	7. 学校は、教会など他のキリスト教関係団体から礼拝の奨励者を招いている。		5. 学校から進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に受けている。	4. 学校は、学校外部のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持っている。
		教会などキリスト教関係団体を通じて献金を広く献げている。	8. 学校は、教会などキリスト教関係団体を通じて献金を広く行っている。			
		キリスト教諸団体と種々の連携を図っている。	9. 学校は、キリスト教諸団体と種々の連携を図っている。			
ガイドライン	教育課程についての教職員間の共通理解と連携	教員が教職課程の全体像を理解している。	10. 学校は、進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に行っている。	2. 学校から進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に受けている。		
		教務部を中心として教員は教育課程について連携を図っている。	11. 学校は、教育課程の編成や実施について教務部を中心として連携を図っている。			
	生徒の学力・体力の的確な把握	外部テストの導入などにより、より客観的な学力把握に努めている。	12. 学校は、外部テストなどを活用して生徒の学力を把握し、その後の指導に役立っている。	3. 学校は、生徒の学力・体力を的確に評価している。	6. 実力テスト・GTECなどの外部テストは、自分の学力分析やその後の学習に役立っている。	
		教員は学力評価についての理解向上に努めている。	13. 学校は、生徒の学力・体力の的確な評価に努めている。			
		教員は体力評価についての理解向上に努めている。				
	各教科の特性に応じた授業の工夫	教員は自らが担当する教科の特性を理解している。	14. 教員(自分)は、授業を通じ、生徒に適正な学力を定着させている。	4. 学校は、授業を通じ、生徒に適切な学力の定着を図っている。	8. 授業を通じ、学力がついている。	
		より質の高い授業を目指して、教員は不断の研究を行っている。				
		教員は授業研究の成果を活かし、授業への不断の創意工夫をしている。	15. 教員(自分)は、質の高い授業を目指し、授業研究を十分に行っている。			
	個々のニーズや興味関心に応じた授業展開	知的好奇心の喚起に留意した授業が行われている。	16. 教員(自分)は、授業研究の成果を活かし、授業改善の工夫を行っている。	5. 学校は、補習・選択授業を通じ、生徒の個性・能力に応じた学びを展開している。	10. 興味深い内容のある授業がある。	
		学齢に応じて選択授業が展開されている。	17. 学校は、補習・選択授業を通じ、生徒の個性・能力に応じた学びを展開している。			
		補習など特別な学習機会が提供されている。				
	接続学校との連携	中学部と高等部の連携がされている。	18. 高等部は、中学部と適切に情報交換・連携を図っている。	6. 学校は、大学に関する情報を適切に提供している。	13. 大学に関する情報を知り、進路について考える機会がある。	
高等部と大学の連携がされている。		19. 高等部は、大学・各学部と適切に連携を図っている。				

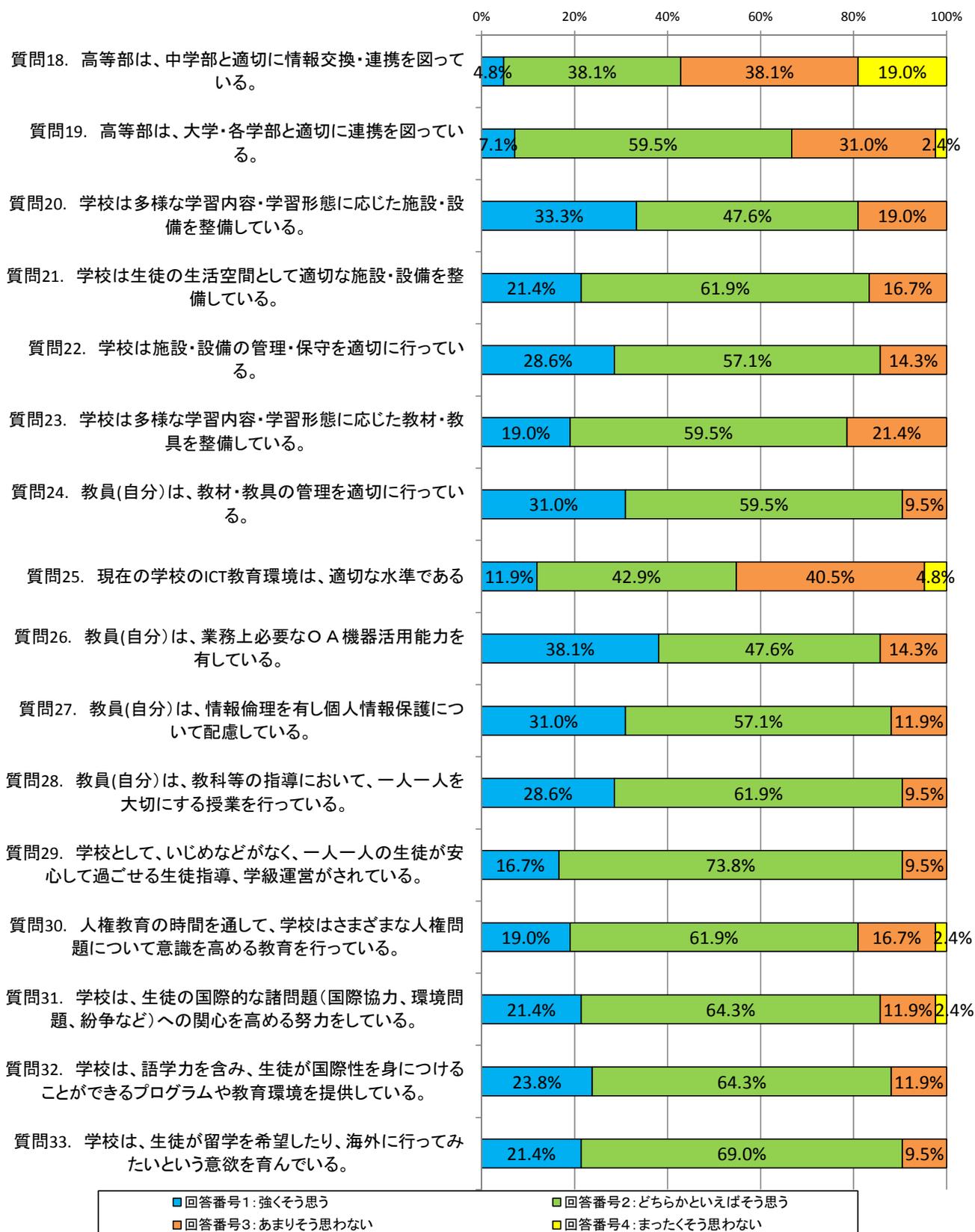
2014年度 学校評価 実施項目一覧（高等部）

ガイドライン	教育環境整備	施設・設備の充実	多様な学習内容・学習形態に対応した施設・設備が整備されている。	20. 学校は多様な学習内容・学習形態に応じた施設・設備を整備している。	7. 学校は多様な学習内容・学習形態に応じた施設・設備を整備している。	14. 学習に必要な施設・設備・教具（映像・音響、実験・実習、体育等）が十分整備されている。
			生徒の生活空間として学校施設・設備が提供されている。	21. 学校は生徒の生活空間として適切な施設・設備を整備している。		15. 学習面以外の学校生活に必要な施設・設備などが十分整備されている。
			施設・設備の管理・保守が適正に行われている。（ICT機器の管理を含む）	22. 学校は施設・設備の管理・保守を適切に行っている。		
	教材・教具の充実	多様な学習内容・学習形態に対応した教材・教具が整備されている。	23. 学校は多様な学習内容・学習形態に応じた教材・教具を整備している。			
		教材・教具の管理が適正に行われている。	24. 教員（自分）は、教材・教具の管理を適切に行っている。			
	学校のICT環境について	時代に対応した、学校のICT環境を整備する	25. 現在の学校のICT教育環境は、適切な水準である		16. 現在の学校の、パソコン、プロジェクターなどのICT機器は、適切に提供、設置されている。	
教員は業務上必要なOA機器活用能力を有している。		26. 教員（自分）は、業務上必要なOA機器活用能力を有している。				
教員は適切な情報倫理・個人情報保護倫理を有している。		27. 教員（自分）は、情報倫理を有し個人情報保護について配慮している。				
独自項目	人権尊重の精神と実践力の育成	教育活動全体を通じて人権尊重の視点に立った学校づくりを進める。	28. 教員（自分）は、教科等の指導において、一人一人を大切に授業を行っている。	8. いじめのアンケートや人権講座・ホームルームでの取り組み等を通して、学校としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる。	17. 学校の教育活動全体で一人一人の生徒の人権が尊重される環境になっている。	
			29. 学校として、いじめなどがなく、一人一人の生徒が安心して過ごせる生徒指導、学級運営がされている。	9. 生徒自身が種々の人権問題についてより関心を持つようになったと家庭で感じる。	18. いじめのアンケートや人権講座・ホームルームでの取り組み等を通して、学校としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる。	
			30. 人権教育の時間を通して、学校はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている。		19. 人権教育の時間を通して、学校はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている。	
独自項目	国際的な問題への取組意欲・関心	生徒に、国際的な諸問題（国際協力、環境問題、紛争など）に関心を持たせる。	31. 学校は、生徒の国際的な諸問題（国際協力、環境問題、紛争など）への関心を高める努力をしている。	10. 学校は、生徒の国際的な問題への関心を高める努力をしている。	20. 国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる。	
		語学力を含み、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや学校環境を充実させる。	32. 学校は、語学力を含み、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している。	11. 学校は、語学力を含み、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している。	21. 語学力を含み、国際性を身につけることができるプログラムなどが学校で提供されている。	
		海外留学や、海外に行ってみたいという意欲を持たせる。	33. 学校は、生徒が留学を希望したり、海外に行ってみたいという意欲を育てている。	12. 学校は、生徒が留学を希望したり、海外に行ってみたいという意欲を育てている。	22. 将来、海外に行ったり、機会があれば留学したいと感じている。	

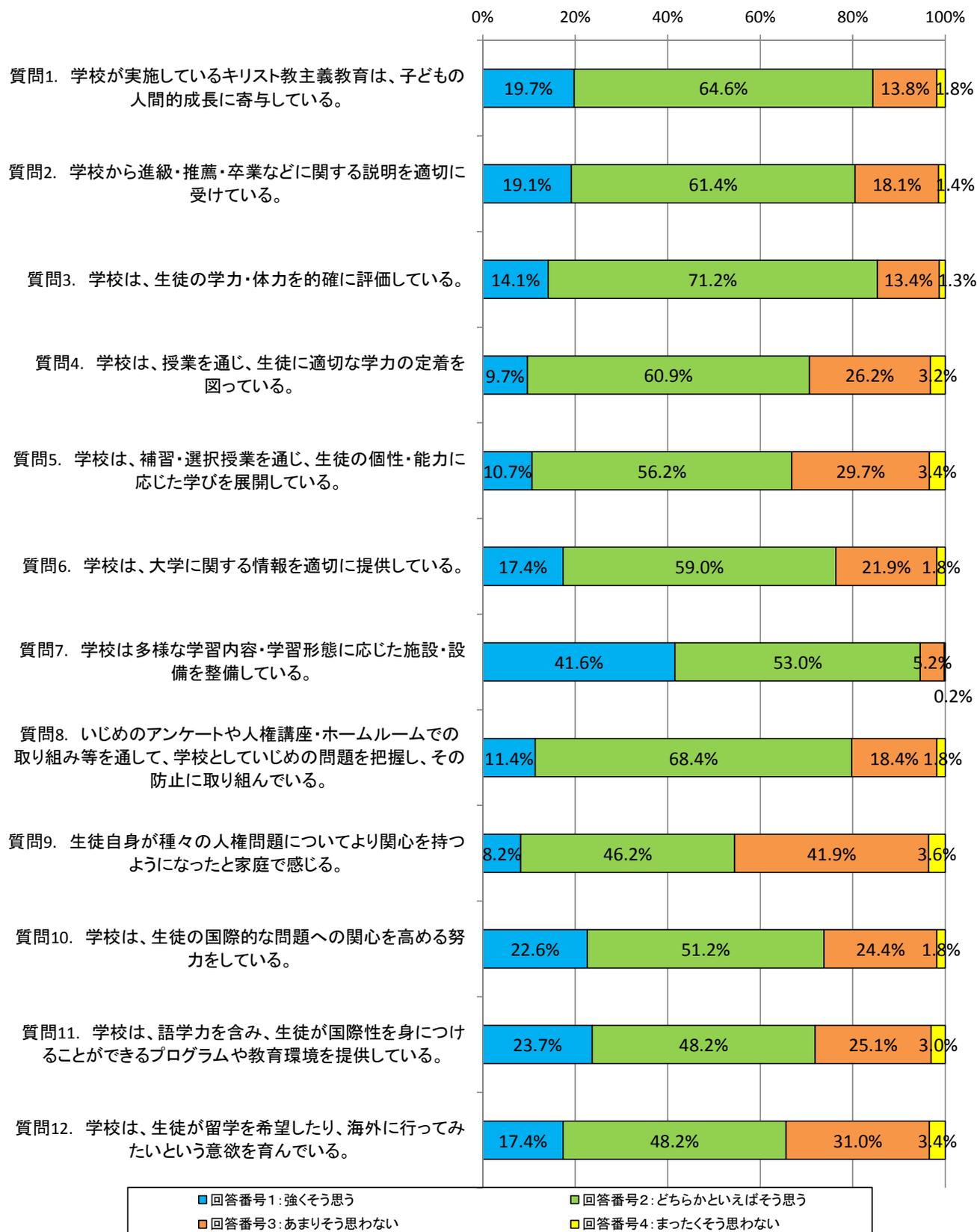
2014年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・教員 質問1～17 (回収率95.5% 42人/44人中)



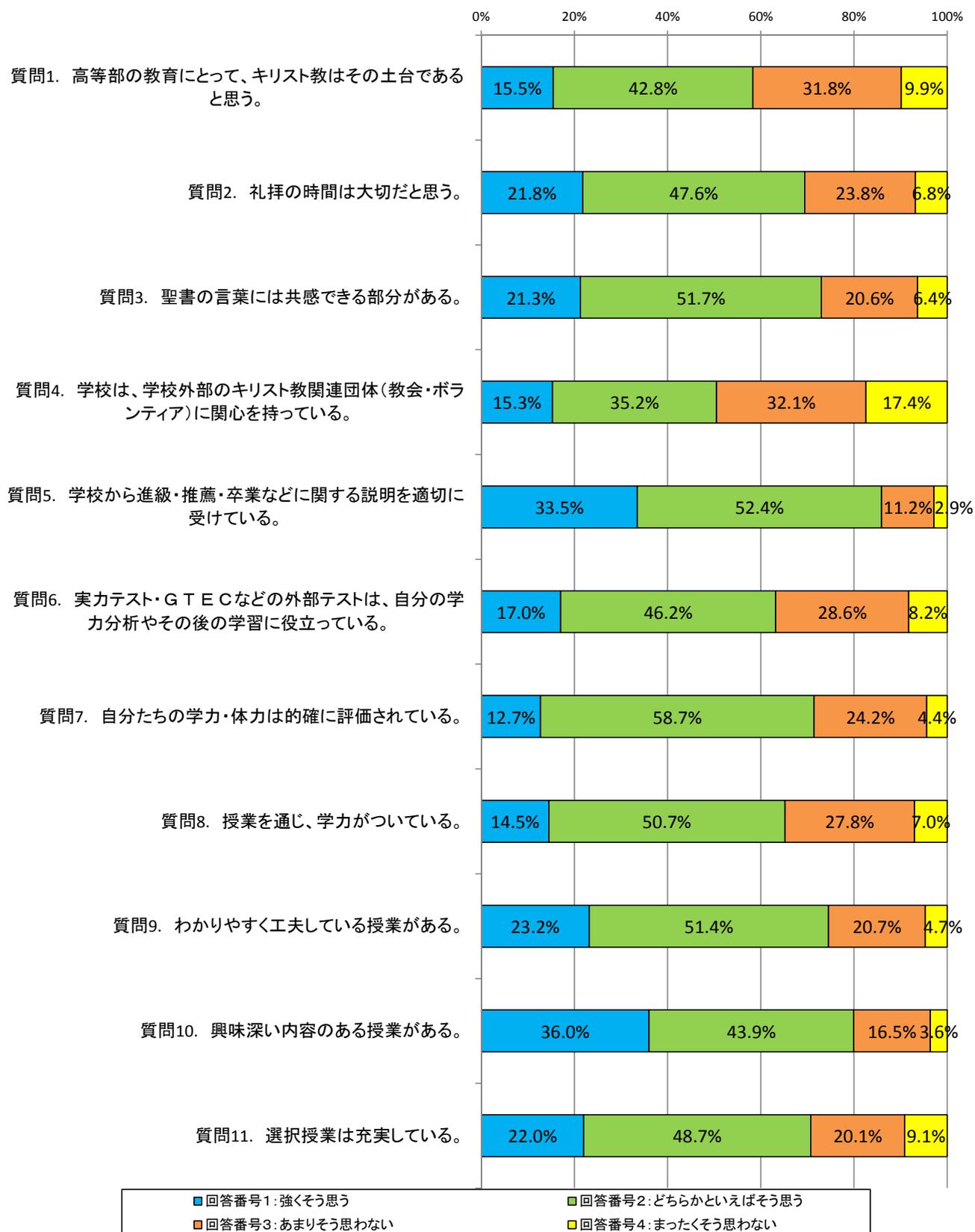
2014年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・教員 質問18～33 (回収率95.5% 42人/44人中)



2014年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・保護者（回収率60.2% 559人/929人中）



2014年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒 質問1～11 (回収率98.2% 912人/929人中)



2014年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒 質問12～22 (回収率98.2% 912人/929人中)

